2年間を振り返って（熱と光を我が心に……）

学習会専任指導員　　中山　英治

板野中学校に来て早くも２年が過ぎてしまった。当初は部落問題についてほとんど知らない状態で板野に来ることになった。

まず板野中学校に来て思ったことは，同和教育の大切さはかなり以前から言われているのに，どうしてそんなにそれぞれの中学校によって取り組み方に違いがあるんだろう。ということだった。しかしそれは本当のところ，部落問題についてあまりにも知らなさすぎる自分のいいわけでもあった。

板野に赴任すると決まった時点で，自分がこれまで受けてきた同和教育を振り返ってみた。あまり記憶にない。どんな勉強をしてきたか。全く覚えがない。確かに部落問題の啓発の映画は見た。それについて作文も書いていた。しかし書いた内容は全く覚えていない。それどころかどんな映画であったかも忘れてしまっている。しかし部落問題を考える授業があったことは確かである。今になっては当時の自分の部落問題に対する態度が悔やまれてならない。

しかし自分なりには人並みの人権感覚は身につけてきたと思っていた。そんな自分なりの自信も板野に来るまでの話だった。いざ中学校に来てみると，自分が学んできた同和教育など何であったのかと思わされることばかりであった。学習会に小学校のときから参加してきている生徒たちの方がはるかに鋭い人権感覚と差別を見抜く目を持っていた。

なかなか部落問題の本質に自ら入っていけず，考えさせられることが多い日々が続いた。もっと深く，真剣に部落問題を考えていかなければと，頭では思っているのにいざとなると進まない。考えれば考えるほど苦しくなってきた。そして，生徒の方が，特に学習会に参加している生徒の方が自分よりも解放された部落問題に関しての意識を持っていることに，頑張らねばという思いにさせられると同時に，教師というのは生徒に教える立場であるというのが頭の中にあったのか，生徒が感心するような，すばらしいことを言わなければという気持ちにさせ，その場しのぎの聞こえのいいことを並べるようになっていた。

※

ただ聞こえのいいだけの内容の言葉では，なかなか生徒の目を学習会に向けることができない。普段の学習会だけでなく，いくつかの行事のときにも参加を呼びかけることはたびたびあった。しかしいくら呼びかけてもきれいごとを並べた説得ではなかなか生徒も「学習会に行ってみよう」とは考えてくれない。そのうち誘い方が強引になってきて，無理矢理参加するようにもっていったこともあった。このときほど後味の悪いものはない。そのうえ無理矢理参加させられたというのが生徒の考えにもあるのか，その行事が生徒にとっては苦痛の時間になって，終わるのを待ちわびるようになった。そして次の行事のときにまた一段と参加したくない気持ちだけを大きくしていったように思う。私自身の考え方の中に，知らず知らずのうちに“参加さえするれば‥‥。”というものがあったのだと思う。

部落問題が自分自身のものになっていないのか，生徒を学習会に参加させることだけを考えすぎて，どうして学習会に誘うのか。どうして学習会に参加していかなければならないのか，ということをありふれた，説教じみたことばかり並べて，しかも自分は部落問題のことをよく知っているかのような，そして自分は差別してないんだというような口振りで・・・。

※

学習会の本当の大切さをはじめて感じたのは参加生徒が減ってきているのではと感じたときだった。２年生のときは比較的他の会場と比べて参加者も集まり，部落問題学習にも目を輝かせて参加していた会場の生徒たちが，３年生になって少しずつ参加者が少なくなってきた。３年生になって受験を控えて塾が増えたり，部活で最高学年として，総体を控えて部活に打ち込む生徒もあった。そんな中で普段の学習会に参加が減ってくる傾向になってきた。全く参加しなくなった生徒はほとんどいなかったが，毎回参加していた生徒がときどき休むようになって，毎回必ず参加している生徒が減った。そしてそんな生徒たちも部落問題学習の日は塾や部活よりも学習会の部落問題学習に参加してくる。部落問題学習の日はそれまでと変わらない参加者があり，また，これまで参加していなかった仲間も新たに参加してくるようになってきた。１，２年生には，教科の学習をするときにはほとんど参加するのに部落問題学習の日は休みがちになる生徒はたくさんいた。なのに３年生に関してはその逆になってきた。

このことだけは素直に喜んでいいのか，それとも参加してくれる学習会になってないのかというようにも思えた。やはり部落問題学習に大勢参加してくるということは，部落問題学習で語り合える喜びを分かち合えたということでないかと思う。私自身，学習会が本当に充実してきたとき，今行っているような各教科の学習の時間は面白くなくなってくるのでないかと思う。

それにしてもやはり参加者が少ない日や参加者が少人数の会場，学年の毎日の学習会は寂しかった。重苦しかった。受験を控えて黙々と勉強している中で，会話も減ってきて，シーンとした部屋の中では，「去年の今頃はもっと参加者がいたんだろうなあ」と思うと，どこにこのいらだちとあせりを持っていっていいのかわからなかった。

※

大学を卒業してすぐに板野中学校で学習会専任指導員として勤務したこれまでの２年間は，自分にとって激動の２年間であった。すべての先輩の先生方がしていることや話していることを“こうすればいいんだ”“そう話せばよかったんだ”と受けとめていくしかなかった２年前に比べて，今は時には“それは違うだろ”と思い，自分の意見がもてるようになってきた。いつ頃かはわからないが全体学習が変えてくれたのでないかと思う。

ある先輩の先生は全体学習があるたびに自ら挙手して発表を行っていた。その全体学習の中で私自身が発表するのに１年半の月日を費やした。はじめのころの全体学習の内容以前に，そのスケールの大きさにびっくりしていたころは別としても，“何か言ってみたい”と思うようになってからかなりの時間がたっていた。そのときの発言内容はほとんど覚えてないが，足がふるえて，持っていたマイクが汗でぬれていたことだけははっきり覚えている。

そしてこのとき発言するきっかけになったのは多分，この１年間の各学年の全体学習の中で，頻繁に学習会のことについて話し合っていたこと，同時に学習会での部落問題学習が一段と熱と光を持ってきたことが自分の考えも変えてきたのでないかと思う。そしてその全体学習で学習会を知らない生徒が，学習会に参加している生徒たちのことをどう思うかという質問に，「どうも思わない。」「学習会の一泊研修や各行事が面白そうだ。」となにげなく発表するのを聞いた学習会参加者のひとりがこみ上げてくる怒りと共に「学習会はそんなものでない。そんないい加減な思いで学習会に参加していない。」と訴えたことが，私がひとりの全体学習参加者として発言する直接のきっかけとなった。生徒が私に発言する勇気を与えてくれた。

※

同和教育は教育であっても，方程式や単語を教えるように教えることはできないと思う。“いくら差別するな”と言っても，それでは差別はなくなっていかない。人間の心から，社会から差別する意識を取り除いていく方法をこの全体学習で学んだような気がする。講演や研修で同和教育の仕方や進め方を学んだことよりも，もっともっと大切な“共に闘う”ということを全体学習が私に教えてくれた。

今もっとも恥ずかしいことは，板野中学校に赴任した直後は何気なく，自分の受けてきた同和教育はほとんど覚えてないと答えていたことである。自分が差別解消のために何もしようとしなかっただけのことなのに，よくもそんなことが言えたなあと思う。これから先，生徒と共に部落問題を考えるとき，同じような思いの生徒をつくりたくない。そのためにもこの全体学習で得た熱と光を我が心に秘めて，共に闘っていきたい。そして，変えられるだけの２年間であったけれども，はやく，共に変わっていける人間にならなければと思う。